

## 知と真なる思わく

プラトン『テアイテトス』201a-cを中心に

福田宗太郎(京都大学)

単に信じていることと知っていることの違いは何か。この問いは伝統的に認識論の問いとされてきた。現代の認識論において議論の対象となってきたいわゆる伝統的な知識定義によれば、知識は「正当化された真なる信念」である。この知識定義を定式化しその問題点を指摘したことで、その後の正当化をめぐる論争の火付け役となった Gettier は、有名な論文の注で「プラトンは『テアイテトス』201 において何かこのような定義を考察し、おそらく『メノン』98 においてそれを受け入れているように思われる」と述べている。たしかに初期対話篇『メノン』では正しい思わくを知にするものとして「原因(根拠)の思考」が挙げられ(98a1-6)、後期対話篇『テアイテトス』においては「説明を伴った真なる思わくが知である」と言われている(201c7-d1)。

しかしプラトンの主著とされる中期対話篇『国家』を読む者は、知の対象としてのアイデアの存在と、知と思わくとの間の断絶とも呼べるような厳しい区別(『国家』V 巻)に目が向くだろう。この事態に対して、現代において一般的な二種類の知識による説明が試みられてきた。対象との直接的な関係についての見知りによる知識(knowledge by acquaintance)と、対象についての命題的な記述として理解される記述による知識(knowledge by description)、あるいは命題知(propositional knowledge)と呼ばれるものである。『国家』V 巻に典型的に見られるように知覚とのアナロジーで知識と思わくの区別をしていること(476d-480a)は、プラトンがある種の見知りの知を重視していて、知識について「対象の性格」や、主体と対象との「直接的な関係」を重要視していると伝統的に理解されてきた(e.g. Robinson, Cornford)。同様に『メノン』におけるラリサへの道(96e-97c)や『テアイテトス』における陪審員の例(200d-201c)をみると、特定の場所への道を知るためには実際にその道を歩くこと、ある出来事について知るためにはそれを目撃していることが必要とされているように見える。けれどもすでに指摘したように、『メノン』と『テアイテトス』には知と真なる思わくを区別するものとして説明への言及が見られ、このことは何か命題的な知を志向していることを示唆しているように見える。これらの要素はどのように調停されるのか。

本発表の目的は、『テアイテトス』における陪審員の例(200d-201c)を考察の中心に置き、プラトンにおいて対象と主体との直接的な関係がどのように知と真なる思わくの区別に影響しているのか明らかにすること、そこに見られるプラトンの知についての思考がいわゆる伝統的な知識定義とどのように異なるのか検討することにある。

『テアイテトス』のいわゆる第二部において知が真なる思わくであると主張するテアイテトスに対して、ソクラテスはそれを否定する技術として弁論術を挙げる(201a)。法廷における弁論は水時計によって時間が制限されており、そのわずかな時間では教えるということはできないため、弁論術によって陪審員は説得され、真相を教えられるのではなく弁論家が望むように思われる(201a7-b4)。そして目撃者だけが知ることが出来る事柄について、正当な説得をされた場合、陪

審員は真なる思わくを持つが知を持たない(201b8-c6)。従来、この箇所には知と教えることについて矛盾するように見える二つの想定が読み取られてきた。それは(K1)時間制限がなければ知を伝達し教えることが出来るという想定と、(K2)目撃者だけが知ることが出来るという想定である。

このパラドックスが Burnyeat によって明確な形で指摘されてから、K1 と K2 の関係についていくつかの解釈が提示されてきた。本発表ではまず、Burnyeat の主張とは異なり K1 は否定されていないこと、Lewis の主張とは異なり目撃することと教えられることは同じ対象に適用されていることを明らかにする。その上で、Nawar の主張するように両者は知の選言的な必要条件を構成していることを明らかにする。

出来事の実相を知る方法が、目撃をするか、それを目撃者によって教えられることだとすると、どちらの方法によっても獲得される知のあり方とはどのようなものなのか。そして説明を必要とされる知とそうではない真なる思わくはどのように異なるのが問題になるだろう。これらの問題については、Burnyeat の解釈を擁護しつつ修正する。Burnyeat は、知には目撃が必要だという主張を一つのアナロジーとして理解し、プラトンにおける知は対象についての体系的な理解(understanding)だと主張する。感覚知覚によって事物の全体を見る目撃者は、項目相互の説明的な関係を知覚する訳ではないが語ることを以上のことを知っており、総観的な把握(synoptic grasp)が目撃者とその他の人との間のギャップを示している。そのため知は理解であると主張する哲学者にとって目撃は有用なアナロジーになると Burnyeat は主張する。たしかに目撃することのアナロジーは、Burnyeat が主張しているように、プラトンにおける知が対象についての理解であることを示唆している。しかし目撃することは知を獲得することを可能にするが、理解して説明するためには言語化する必要があるため、他者に言葉によって伝達すること教えることが可能である。ただしプラトンは『メノン』において、知は教えられるのではなく主体自らが想起するのだと論じている。発表では『メノン』において想定されている教えることの意味についても説明を試みる。

### 【文献】

- Burnyeat, M. F., [1] 'Socrates and the Jury: Paradoxes in Plato's Distinction between Knowledge and True Belief', *Proceedings of the Aristotelian Society Supplementary Volume 54* (1980), 173-91.
- [2] 'Wittgenstein and Augustine De Magistro', *Proceedings of the Aristotelian Society* 61 (1987), 1-24.
- Cornford, F. M., *Plato's Theory of Knowledge* (London: 1935).
- Gettier, E. (1963), 'Is Justified True Belief Knowledge?', *Analysis* 23 (1963), 121-123
- Lewis, F. A., 'Knowledge and the Eyewitness: Plato *Theaetetus* 201a-c', *Canadian Journal of Philosophy* 11 (1981), 185-197.
- Nawar, T., 'Knowledge and True Belief at *Theaetetus* 201a-c', *British Journal for the History of Philosophy* 21 (2013), 1052-1070.
- Robinson, R., 'Forms and Error in Plato's *Theaetetus*', *Philosophical Review* 59 (1950), 3-30.